橘曙覽遺稿

# 志濃夫廼舍歌集

二

土岐文庫
文庫17
W48
2

文庫 17
W48
2

昭和六十年二月一日
土岐善麿氏寄贈

0101851946 13

早稲田大学図書



正月ついたちはも鶯鳴き旅とりへは余
も聞てむと囚あけたいくくうちまもり居り
くもと今一声さにせいたちはもれの祝ふ聞つ
物ぬ安やすく知るもみの形といひあへりくちぬ
しら思へとすへふし
昔もつくむ月の中乃うくひすは面えりたいく鳴も有らむ

柳辯香

うぐひすとふく青む六田乃柳原めとる新は緑替もなりつる紀

雀鷽百

隙あらく見し枝こも苔と苔うつれまりひしゆ咲そうつに紀

宮石山うゆきるにあるしるもひてゐもろとも

てふれ

摘とうし香乃園生のうひ木芽るひ試をと摘ニさせけ紀

ミちのれハなすはあるめとおゆきの急き摘きて煮しるたりんな

宮内省図書寮

宋田眞信らはめて江門へ物すに紀ニ

めぬるに紀埜山るく乃烽草うひ旅衣すりるやゆく

月前虫

身ひとつの穐うなりてや蟋蟀ふ紀あらるる月の夜ふく

雨中鹿

鹿の音乃志ぬをとうるる聞をりる在明の月や雨と成けむ

饗

暇ふれ田廬乃志ぬ行ふりけひや晝は茅かり夜ハ綯索ひ

二月十日本保ニ物しる河埜氏ニやとりて有けるニ十二
日なり風ひきてうち臥しらける病藥の吏ふとある
しるしあるくすり物しくをるにより加しして十九日の
朝病床おき出しりけりさる病りしを今歳ハ寒さ
はゝしうて鳴んとも思ひてありける鶯のうゑ
殘しう二声三声しけるはいかハあるとうをしう
て
うくひすもうゑや来ゐる立ゐて我むうをしき今朝の朝床

本保ニて螢の虫のむしうをしるを見ゆ
苍ちゝふ風ふ吹ゝさゝらてほしゐるけゆく野路の川をひ
水風涼
枕ゝりあをゝ通ふこのせのゝちゝ水ある宿乃竹のゝゝふし
やゝひハゝり本保の河埜氏ニやとりをりけるある事
志けしをあゝぬゝちふるにゝふ人ををひとりゝにゝ
ゝひゝくゝなくおのをひとり宿もりしをりていとちゝ
さゝしゝゝ物しける皆

世の人は花見る春乃すくふさに　はとひくゝるは我月日うれ

閑居皆雨

暁も待さてとく過ニけりゆけ窓とは月はいつ〻て雲

古寺鐘

麓寺のはゝ〻はいろもう旅消て夕きりかく過ひく鐘乃音

忠臣待旦

百〻ぢや御げ〻乃うえは朝霜を人ゝ後れて蹈〻日もれし

稲山路

朝のせニゆゝさて落るさく桑ニ小笠うゝゝ妹乃ゝ山路

市

なゝひとゆうゝ風ともふく空手ゝて辰の市人おゆきふりけり

赤

賤ゝ家這入せハめて物ゝは畑のめくりはゝ旅き乃色

山家床

土牀ゝゝろ乃上りきゝゝのうも行末とれくゝひきかくゝむ

我りゝふ過てとゝゝけるる

起臥しやすくふくゝ苔うゑゝ目ふゝひいまゝ神の目おゝは
歛風乃目うおろ見えるゆ神こは此天地ニうむにをまに
ゝうて我きゝ好き心さりくて神も神と身成おゝとけむ

亀

けゝ出うゆ甲をろゆるゝふる族乃おちくゝ乃や亀も始むら

搗衣

槌をゝニゝゝ乃手ゝゆけこゝる子ゝも衣ゝちふゝ里のゝゝ
ゝは乃人思ふ心乃手力のうきりにおめてゝりやちゝろも

畑艸

昏埜やくゝさゝたおゝて艸燃にけふりの靡きおりろき哉

山家樋

うきふゝハぬけゝゆ見ゆ樋と筧竹猶よの中ゝ外ハ流ゝに

納涼

口あゝひいひあふ賤の門ゝゝ暑さてゝゆゝのゝさひゝハふし

鹿声近

けゝゝれくゝゝ鳴ゝて山里乃垣ゆすゝゆく此夜ゝろくゝも

莫山雪

墨ぬりの夕の雲ゆまとはをて白さいのこハに嶺乃こゑゆ紀

閑庭霜

庭中ゑ来こ弐狐乃とゑ音ゑ枯生の霜ゆ聞く夜さむしも

夏ゑまける詩の中ゑ

遣水ゆ来ゑはひいれる邨鶏さほ江をかいの志いく涼しーも

稲庭

炊雨一ふりこゑゆ庭のさほ見ゆる紅葉の今朝の色ゑ

ゆゑはの朝いしんふにいさちゆる弐いくくさいふゑ

こちゑくさふとしけゆる峯

撫ゆらりゆ弐ハめくゑひかいりあいゆる父乃とゑれゆ歌と知弐

岡部君の江戸へゆきゆみこるゑそゑまつ作る

ゑ出ゑちほくく小笠乃をゑ弐くゑとゆくをゆくまをこちふゆ弐り

贈正三位正成公

一日生きは一日ゆゑろを大皇ゑ御ゑめに盡ゑ吾家乃このせ

藤原忠文卿

荒駒乃艸のゑて音乃何乃みに宿直乃夜と人もしりけむ

袈裟のまゝ

夕霜乃身にしるきをと鴛鴦のいきを思ひ羽ハあとニ重なれ

三月

わくらゝ風も此一月をせにしていとり櫻乃時乃なりける

砂月涼

うとの濱千さとに目路ゝ塵なふこすゝしに廣き砂上の月

蓮合露

多まりゝ葉乃と見せぬ葩乃めを色きよ蓮乃あと露

竹画

葦といひ楊と見なくかい淀し心乃ゝけなしゝなめそふあ

炑風

とゝしひなゝうにて過る一こゑも炑ゝふりゝ風閨乃ふりなき

新樹

かゝきに一鳴なきてくゝりにる枝見るゝひニふいゝの陰

閏八月八り多田氏ニさゝハとて富石山乃行て日

くもまをあらひて

白雲はゆふへ乃山之うへをもとも立いてむとも人はなしせ之

檮衣處之

ちえこそ星より志ゆき槌數之紀めゝ級里の多さ級ゝ知ゝ

辻春生今日歌の會とれもくきふりをにてゝ

之江戸ふゝ叔父之ゆゝけゝ之ゝ古の会の之

へきゝゝいおこしにやそとゝおゝひ級ゝとゝ

ふゝいて之今さひゝまゝけの題古寺紅葉を傷之

哥之ふゝ之てゝく

見之来ゝきゝおゝいゝ氣山寺のとゝちゝりぬと聞ゝはまことゝ

今ゝ父乃三十七年毋の五十年のゝゝゝゝ

りをゝゝゝゝ

顯ハさむ御名ハうけても及ひ身の恥をゝ之殘さゝもゝゝ

ふゝ級しゝゝ白髪おひゝ老けむとゝひなき我をいゝゝゝゝ

いひゝもゝ紀身のゝをゝゝ泣て御墓のもとゝゝゝゝ

ゝいゝゝ級ふゝめゝ級ゝむゝ

柞葉のかけて五十の翁さひのふかひふき霜の下くち

冨田禮彦うむすめのこまうけうとうこ

墨をすり木の芽攻やし朝夕にたえし容儀忘れうめむ

日高万二満う筑前国にのこる

君う今朝門出にいくく雪の上乃跡さへもけ残さとう思ふ

雪朝遠樹

あけうる空うとうめ夜あくしの行へしう多記杉むう乃ゆき

いまはふき人となりにうり府中乃山本の叔父う

たのも本保の里にとまれすといひる玖りうおに

八吉埜瀬の橋いとあやふきとうなりいくく心

いひせよとこひさとれ乃玖此けこうほし

こに老人のせうにけりえりさくうのかと

身ニーむハうう思ひいさうこ今日まこそ来

うりう

さくうせよとこひ一言いはむくおとひうこくうらしのせ乃橋

さくすきう道すこ行くに嶌崎土夫うれ乃

旅居とゝまる二本保ゝとて来るゝあふ土夫よ

一翁おもふゝ行け我れ今日一日のうちは

うゝてゆるへきゝあるいてこそ別さんといは

るーゝせむもないさゝをさりゆくハ本保ま

て来ゝゝおのをれ立ゝり通雄ゝゆきてを

そゝゝゝうちかくゝひさてもうくもはゝひこん

よゝゝゝと道のうゝゝすゝいひるあひ

とゝ

いさ来ゝせ通雄ゝ家ハ酒もありあゝこひて飲て別をむ

をゝて相ゝをおのを府中のかゝ行けるゝ

途のをとゝて土夫主ゝ福井をゝてゆゝゝ

行へゝゝゝおゝゝやりゝゆ

日ハ暮をぬ山も見ゝゝふりけり別をゝ人ハいゝくゆくゝむ

妓院雪

庭ゝ雪ゝはをまゝゝ少女ゝ其手ハ誰ゝぬくをゝゝゝ

俠家雪

眞荒男ら手ゝ[illegible]し彩る虎の血乃くゝぼり赤し門のゝゝ雪

ま[illegible]人伝屋所ゝ乃ゝて鳥うちに我ハ出ゆくゝとゝれのゆき

須賀原氏の三月三日初弓のいとひとゝゝこと

ものゝ[illegible]ゝ詞ゝはをて

弓とゝゝ物は男兒のゝるとのとちおゝ心乃いさゝてや見る

飛驒国山崎弘泰ゝまゝりけらゝ冨田禮彦ら

告れこらせけら昔弘泰ハ荏名翁の教子ゝてある

れ[illegible]枝にやゝて在し爻鶏一い失さゝる[illegible]へさひしも

薔薇

羽かゝゝす蜂あゝゝうに見ふさゝく囮[illegible]ゝ咲くちゝひゝ[illegible]

海棠

くゝゝ乃井の唇いゝゝふまめ[illegible]て雨ゝゝ[illegible]ゝる苔乃かほらさ

棋子

雨ゝゝ日ゝ経てあゝ戸にけ見れハ標て梅ありゝ[illegible]實三四

篆刻をいゝゝみゝて行脚をむゝとゝゝゝる　江戸

人轟松屋ら四十賀ゝ哥こひゝゝ[illegible]ハ

花さふ[illegible]月さかりしく旅ちろもうくるる千をせも重く行しを

杣人

う[illegible]ハりにる木は無しと杣とりし杣に入る子もいひてふけきり

佐野君の婚姻

ちをもとちをる夜床うちうはす妹脊の袖や雀の毛ろも

海邊夏月

ひしらくに月のうけさとをひて波間をしをれ蜑の呼ひをを

月あるき夜ひとり夜ふりなりるる

浮雲

[illegible]空ふて今よひハりを月を見まほし

閑昼蚫

茅子すをれをれき苍なる折うちふ蘺りあるる蚫の色かふ

痩て咲く垣の朝貌見るにをけ蚫く[illegible]ふ伏屋をる思ふ

鬬雞

逢坂の杉の下ちもと闇き雞の音ふこゆをいゆる旅人

橋螢

なうをしくをれをるる影もひのくらて水音すくる兎道の川橋

江戸人高橋氏本保之年号屋号をひら
かゝおくりゐ江戸へ之
一日経ハ一日ちうゐく故ちとの空なんゝを道いそ
同し昔ゝれむすゝ直言之
小笠ゝり杖ゝてゐ足ゝ心残ほくせ岐蘇乃山衢
初尾苍
旅ひとれゝゝ行野路のとゝ残り船ゐく笠ニ垂かゝほふり
出雲国人小川正海のゝれ国へかゝほニ

残りも頃ハ二ゝゝ君を三保岬羅摩の船乃とゝりとゝめ
妹ハゝ扨谷之あゝひて酒乃ゝ醉のゝれ乃之かゝ
ほゝゝおほきやゝ多石の行ほニ戯れ乃ゝ
あゝく多ゝ顔ゝちふりて櫛山孔まゝ醉さゝ孔あさ笑ふこゝも
青牛翁の許ゝゝひてありゝついておとゝゝ
ひて書畫ゝもとゝ出さゝ見けゝ昔
品さ昔ゝいひおゝゝて古ひゝ風物をあまゝニ見ゝてゆくかれ
古も乃ゝ中之君ゝもすおおきて今の世ふゝゐ品と見乃ふ

川津君の女郎花もゝひ二人おこせけるゆゑをゝ

てやゝてゝゝゝてほうけ風

ちき出てゝゝいとけふ況ゆゑれへいうてう君ゑほうせるへ軍

ひゝと土ゑ遊ちまてほゝ枕もゝ忘れくちひさ況

伏屋のうちゑ竹生いて長うろひうりゆゝ況其

まゝゑおきて

壁ゝゝふ竹ゑ肩ゝゝ囪のうちみーろくゝひ二のもゝえゝ振る

滕いゝはうもゆゝめ竹屋況竹ゑゝ経て身をゝ日め況り

※亥のゝの八月廿九日はゝめて歯一ゐおちる

を見ゆ

ふけゝける吾身の穐をゝゝ知ゝて落葉あゆむ痴況の子こうふ

上月景光君の都ゑ在ゑ5ゝておくりける人ゑ物

ゝゝ況ゝとゝゝもありていさめいとゆゝーう思ひを

るうふりけ況

故郷の垣根乃妹ゑ見うるふゝやゝ乃花ゑ目ハうゝるゝ

明日香川淵況あゝ況な流れゝは蟲やにゝゝせ二心ーゆ

中根君乃うしうておとりあまるひとり

おもふことをつけく侘

稲雨そうちおもをそは君の屋のいらうの空ぬなるやるかふ

年魚とふと網うち提け川かりに行ぬ昔なるやあとみぬ

妹の花うきもなにせむ折りて見せく君に見せくもせに

道とはく隅そはせさる月うけをへくりやみ見侘此うの空

雁うの聞ゆるこゑに見やしも玉章うけて來ぬとを侘

十三夜

おくをくの影はなきぬ心よ侘月を今宵の空にまさ毛

鹿声遥

ほさかるうちおくは声も一のちひちくふりて埜へ侘行ふ侘

長月ハうり府中の山本氏の女もこゑこのゆひきは

ひきて此菴にやとりくること有けり著すき夜の

物なとかるて人のもとようきて其戸をけ一お

きりくに思ひけさふ侘の子ひとりそひきてう

ときにへき物ふ一日くれてふりけとハまとこのう

に行んもひんあしき云りありあり今滋う乃をそ
男子に着せて今滋ハおのうみとの中ゝいそて寐
されこそはふりはとろさしてもあるをいまは
おほきふるうるさにふりぬをはひとりくらみしろく
いひこよ風の物ようえりわて肩さ記あるハ袈
ともすれハこうる記手足つさひてなしうゆ寐ま
ゝ寐にうれ柳澤淇園の堪忍ハ執行せさ
をは身に感せさるゆゑうよく忍ゝことなりかる
し弓も堪忍を守るうる我思ゝ乗合の舟をう
事にかるに便りよるこそはふしと思へは京より夜
舟にて浪華へあるひ浪華より又舟にて京へ
ほりゝひとゝに堪忍乃誓古せり人の世りある
乗あひて泊りしうる我思ひいをハいうほうの不自由
も忍ゝに堪さる事ふるはへ夜泊乃せりふさ膝
をりて足を縮ち人の足を枕ゝゆ押あひ脚ゝも
とすれをゆすり起さまてまとろもと思へハ鼾

又目さめて起臥ともにまくらにと雲萍雜志といふ

とのこいそ行くらとのあるなけもと思ひていく

ゐとちろみ中そ

ふとしうふ物乃譬ゑひくふゐもこのふうに寐をさやふくら

府中の松井耕雪ら大きなる黒木もていくらふる

ひるけくさとゝゐ膝のこすゑおき眩ゐらせ頬

つゐいき朝夕の友とす

撫やまゑ火桶のいろになりひとそゐかゆゐゐうと乃上ゐも

ゐうりたしゐ歸れさしけこなくゆひをけのすらゐる哉

旦暮りなつゐ火桶を巖そていきぬと葉ゐたとひめくゐ

見ありきしひるゐ野山乃物うりひをけこいて夜を更ゐふ

にさくちうまゑ

一人さに我とひとゐ心あら人ゑ遇得て此世すくゐ奉

うゐをいき拙ゐ人ゑまくはこうをて後もさちあきゐり

我らきて人あくゐ人ハゐと人から行て我をらしゐひを

寒州

枯乃こゑ莖うす赤紅葡乃腹けふ庭に霜ふりよけぶ

田家灯

賤ちち死夜との語りの何ちまち篁さゝに見するとも火

本保の河埜氏より日ころやとり拔り曉こと寐とも

ろ中まて

朝出いろく旅寢ゐゝゐハ雞の声も夜中になゝゐ打きく

錢乏しうりける皆

米乃泉ふゐゝゝすゝり詩を五三文を作りて賣りてのりけるも

莫蠅虫

聞く夜あり聞さゐ夜何り烁のむゝ鳴やむまろにふりやこめゝむ

咏劍

弱腰ゝふはゐ死者る蝦夷人我日本乃太刀拜ゝ見ゝ

七重ゐ手こて曲けふはまゐゝむ蝦夷圀の太刀ハ劍のハ

社頭雨

古社ありと知られて見ゆる火の影ゐ苔そこ紀山ゝひの雨

水上月

掌ゝ〻そそぐ山ゐけの風水の月さえ冬ゝ〻ゝの有さゝ

梅雨雷客

子規なゝ〻ゝと稀ゝ声きゝ〻君はかへさゝ〻ちゝゝ花のゝ雨

山行伴鹿

日さゝ来る我をは知りて妹の山鹿も袂ニ角さゝてゝ風

雨中旅

竹まくゝ故うゝて寐ゝる宇都の山ゝゝ雨くゝ菅乃古このさ

落葉

柴門志けはゝゝゝも足もゝ紙木葉ゝ埋ゝ一あゝゝこの形

池水鳥

津図乃さゝやとのゝゝゝニ呼かゝ鳴このはゝゝも池の鴛鴦

辻氏の雙松閑戸

紅藍乃塵を二尅の案葉ニうゝめさせる庭乃山ちと

奪下會友

うけゝけの酒ゝ山乃さゝゝも散ゝゝゝ紙いゝゝ木の本

松岡牽山長遠おの九月十六日ゝゝうけゝよ

し聞てとゝゝひゝ物しるゝゝの妻ふるとゝるゝ
ひて有ける田にありとゝのゝ夷もうゑ崩しいひ
いゝゝいさゝ歎きけるありさまいとゝのハをこふん
長遠世ゝあゝ世神世ふゝゝ竪衛のそやう
亡せて古き竪書とゝ物の世ニ傳ハれるゝ無き後
いさく歎きゝゝハぬゝゝゝゝ大同類聚方のゝゝ一
部今も世ゝ乃ゝゝるを大岡ゝとてなほゝし
とゝゝくの書ともニつきていさゝも此道ゝよあ

る夷乃あゝんを取ひろひ一ゐの竪書著さんと思ひ
おゝて貧しき身なゝ其事ゝうつゝゝゝに
いへは得ゝゝ書をも遠きちひゝゝとゝ出し
おとゝゝふゝく力ゐ盡して今ハゝの書ゝうゐての
あゝゐしふゝはゝ過て綴り出るもゝゝゝなほ
全くはゐをゝて有けるを思ひ出ちゝ
ひてはゝれく成ゝゝゝ妻なる者ゝ志ゝゝくのゐ
いゝゝゝゝゝひけるゝ涙ゝゐゝて文筐もさくり

めくりて七冊の文より出され見もてゆくニおのれ
ハ醫のことしるしハいとくさまかよしやあしやハ
見ゆるを薬名病名をはしめよろついへりは
かかれる叓ともを皆皇國語もて假字かれは
物し給へるは皇國念ひの志乃まめしくしちと
ふとしもふみといへりハわれかあかりんまさに來れ
こと有けるよう幼くかきつけりける物より出し見
せて記さぬはいかに思ひかえしんちといひさりしその

ありけるなと思ひ出られて袖ぬらしぬるに妻なる者
思ひいれ人今とりきはも此文のおといひ出て
今三巻ハわれなりまとかくちなしく書をへて我
は目うつくことにとうちなけれけやそふくちりぬる
よまりとうちそへしく語るをきくによむ[illegible]ふさか
るみせめて[illegible]んして詞をさニとて霊代のまえニ
しむく
一部の文かきなへむ程をこに古乃長遠を世よハ在しせて

一ときと二満ちくるまてなけるも世ゝ無き文ぬかきく七巻
書き纒む人まと有て汝ら功績つひに全くふるむ行を術
えゝ唐土きと紀国の術らめくれしの書ど一人書出り

寒艸

う赦りゆく下葉にうもと見らるまに霜いろ紀り庭の萩原

案田眞信ら都へ出さりに五月ハらはうり來

へういふ

待ふる心をくるゆ田もきあおらさ月の拔り違ハにち

其とろ志りまふ君よりとまらしる牡丹の繪ら
うちうくおくへき謂ゝてくもとあ法人乃
ととりまいるるとられよゆとくせる
めくゝ砂露餘りなるう淋しき浅蘊ゝ洩して開ふく葩
大き彩る勢ゆうくるもおきあまふ恵の露乃色ふうゝ草

伊藤子邸主のゝまらけるヨ

青菜山おく昔きめるなとゝきす今歳ハ君ら聞せちりけ

粧美鷹うみまらけるニ

君ひとりとて無くなりて爰の數ふやしゆ我を泣くせいるかふ

羈中更衣

あゝこすゝる衣ひとゑれもなんこゝろ若菜に慰る旅をこゝろこの頃

宰相君よりこまりゝに題待雪

初ゆきのふりなりくく見ふされむ枝をはこさぬ冬枯の庭

江樓流螢

なゝ流ては水もなかめも釣殿の簀子の下ゆくりのひかり

劍

水奔る白蛇なゝてきゝめける焼太刀見れハ獨ゑまもしり

眞宗寺君の男兒うまれるに

獸ミれ膝伏せさせむ獅子の声生もふるゝ立る兒ふ

瀑布

茂りあふ青葉くゝ吹ゆすり伊吹こゝくふ水煙かも

ある昔

何ちゝも昔ゝと念ひこれまくてこゝ流と心ゝうる世の中

忘むと思へとちけゝこすきぬ歎きの中に身ハはてぬへし

人のこゝにうまれあふ三社のうち

伊勢大宮

神酒菜の蔭をあふぎ五十鈴川骨身にしみて清し尊し

石清水

男山さうゆく御世我常磐ゝ見るふるゝ峰の神墻

誓日山

うらゝ山ふもとの芝生踏ありくたゞ神ゝのふ

大国主神

八十神ゝひとりおくれて眞とまゝ帷ゝおもる千のさゝ八ひ

事代主神

天地とともゝ久しく天皇の御尾前ゝ國まもる神

護魔堂とゝ

ともゝ物ゝらけり近きさゝ心ふきもの苅

はゝひゝらるゝよりて蔦ふくなり巖のあらゝ

いとさゝくゝら見ゆさりとそいさつゝ帰ゝん

くちをゝう思ひて此山の石かり出すこゝ我ちら

ゐとする男の子ものるちひさ犯い田りゐいり

酒あ〜めうはけとりめくしふとすやうく

忘ひ〜ちすゐゆくまゐ

とゝち菜の今ハ見〜とゝぬ岩上ゐたさ犯とせ犯醉る顔ハせ

寒尉交案

色あせぬ松ゐまりてかゝあゐ枝ありさむき木かゝしの杜

瀑布

かゐふもて巖の角ゐ怒りくるおとふひ犯こき山の瀧りせ

源義家朝臣

年を經し絲乃ゑ岩ゐ君ゐ手ゐらて治し東の国

西行

心ふき身ゐ犯ハ涙と泣てる兒ゐハ涙乃ゐ犯さりさや

曉昔雨

窓〜〜くふを犯成て在明の月犯ちこさ犯邨しく犯ふ

嶌崎土夫主の軍人の中ゐあるゐ

妹ゐ手ゐかゝる甲乃袖ゐくゝ寐しきぬ耳ゐ聞くや夜嵐

歸りては脚結の紐ゝとのぬまに先顔見せよ待てあらん

朝夕にあひて語ゝ君ゝ思ふはさひき庵にちひ〳〵くらす昼ち

上月君のとはき園うゑ

海中に風にあへりと聞ゝ立さとう捨り我こゝろちへ

白雪乃ふるにつけてもある人の遠き旅路に在る社思へ

同し昔河津君の許に

浪奪海船出ふれぬと聞しより我も心乃〳〵らひて社こ

日數あ〳〵大海の上に〳〵見ぬ心いたるこひ〳〵む

佐埜君のもとに

君さやく歸れをとゝ〳〵思ハを弱こ毋のこ顔見〳〵ひとに

荒波乃〳〵よひぬをとゝ〳〵れく舟つを〳〵と聞ゝう許き

佐〻木久波紫主の許に

舟出れと聞つる日より難波の海なゝハ思ハ君社のこよろ

年し今ハ立ゝ〳〵り來とふ乃社何昔をかりは君顔見する

畑中君乃ゝとに

大ゝ乃の旅とゝあるをいゝてとゝ乃紀舟路に君をやりけむ

髪白き翁なれども父君なおまさり行けるまろいう所もも

宮北君乃許りて

黒駒にみたりまゆ行ける後ゆけ目にけるる君のいまはも旅くらす

日に三たびひ駒あゆませて來うくに顔をハ早くこやの北乃君

案田眞信主の府中に軍人の中に在て

遠くあくりなは在ものと顔見すてあれハ千里を隔ても同し

妹も子もまた田の君なり草枕旅路におくこのうれさうけ況

あら皆

水車ちろも縫ふ蚊とふり二けり岩根木根立物言ひいてし

洛東岡崎の尚綱乃もとより都に乃かり來ると

あくまでひいらお　くりるこのりこに

皆くは谷のうくひす出くて爰に求むる声ぞ乃ちよりに

都に久しう物くる佐藤誠ちとともとより尚綱と

同じさぬこおのもに都に上るへくいひさとせ京

ちろふらむ水のまにく浮州の身ハ何所へもちへらけも

辻春生主の今荘驛ゑ軍人の中ゑあるゑ

夜晝とむらふ人を呼うて声うちかうしうけめうあんむ

吹あうゝ嶺の夜あうゝ火矢の音寐さま有ともいうて寐うさそ

竹内篤主のいくさ人乃中ゑあるゑ此めし妻を迎へて

日のあいくはくもあうめほうに

出うちて行うゝなりけり

太刀みうりてい弘こへ行しあひうめてまと日もてのうめ妹を打さて

正月八日 青牛翁御使ゑて

宰相君より畑艸賜りうけ侍御詩さんうんさせ

まうりけりうの御哥ハ 安御代は竈の煙乃ゝ

なうてけふりくゆうせ賤う伏屋うとあうけうら

けりいとうおくいうゝにまんうそかく

畑くゝ賤う伏屋ニくゆうせて君ゑめくゝう咽ゑあさゆふ

山口清香ゑ筆うりて返りゑうて行うりけうゑ途

うそおううりけんうこういうりてふとう探れと

筆見えにいうゝもまんきやうれくてかく

うさゝいち拔いくゝ餘まる袖ふ涙ハ筆ゑさまうゝてそへう落ニけむ

辻巷生主のことにめさけ〜もくりげるいをひに
忠實さろたこの餅ニ盡しけむいさ玖のさろ〜顯生にけり

雨中新竹

風ふけはうちもかくよりまろひ落る露をふゐめく雨の若竹

冬ゝ埜

倒さろ薄くりて行く水乃末もさひき野邊乃冬ゝの色

夜虫

ちくりちせいもて呼て此虫は寢ると知ろ三夜を明すも

或日多田氏の平生窟より人おこせてれろ庵
の壁の穢をうるはつくろひに來る男のこま
やろる者ニて此ろりはさておけよろめりとおの
ろいとろくをゆ〜ふう机もなるもうはひ
とりておろ〜かろ〜いりやるお乃をハ盗人
の入〜ん夜のこちてうろ〜いうろ〜ふる
とろニ身をちいさくなて此をの子のありさ
ま見をる我ふかゝ玖ろさるんあて

あらをもさくまかこと追ふて壁めるなのこ屋中塗りめくる

十五夜をいとりもいとあくて函ゑさて入るか

けさよふ記物の誰ひとりとひ来る人もか

くなりくまちくくら思ひよひうちふ

りけるか寐とろの中そ

寢てあるをさはなとと此月ぬいくいく人の見ふるもらし

月

盞のうもあるこ成ニけり酣すきふめくる月うけ

橋苔

目ぬきこ沈さよのはらと見ふ詠り苔ニふりくる谷乃古はす

中根君の開發とい里ニきるらくて狩ニ行

えふこともそてうといるる賤ゝ家ゑ入ら

けりあるくとおほくきをの子くく門の外ゑ

けり出てみむくつらをいりふとをほさ

ま我見て

めくまれく身のう詠くさをありうゆ膝折伏るる賤ゝ笑顔

やゝ瓶子もて出て海山の物をいくゝゆけう

れ

みさゝふにはゝとゝもそかゝけ玖君乃いてゝに我ゝさくゝ仮

夜ふけゝゆ歸りゆゝに物ゝゝう打しゝゝともつう

うまゝう

月みゝ玖ふゝゝく歩む川ゝゝの道ハ歸さもいゝくゝと乃うのは

ゝくふのゝゝに

少女子の妹背乃衢のゝひれひきゝくゝくもなゝくとてゆく

朝夏艸

暑き日ゝゝゝし草葉も朝露乃ひゝゝゝ忘れて起こゝりゆく

夏月透竹

ふつの夜乃月の初霜おきあゝ竹の下陰さむくも有ふ

宮北君乃艸庵ゝゝゝひきて歸りゝゝんとまゝ

門送り物しけゝゝこゝ繋ゝてあゝ馬の手

綱ゝゝてこは近きゝゝ得ゝるふゝゝ心ゝかふ

ひておかゆゝなりいゝゝ見ゝゝやと乃ゝへゝ

おのとさるけちニハうとゝもの乃うゝ此すくゝて

しくゝけゝふん見なさゝやゝてうち来りを

一足あゆませさんとする時

千里ゆく陸奥馬をとゝ得ゆと髻ふて〳〵笑る主ゆ〳〵浅

林下幽閑

日〳〵けてゝも檜杉のおくの檜皮ふき枝ふりてふくろふの来る

加賀国打越邯某寺のおひこゝろてよる弓

波山十勝

栞湖朝晴

おとゝ乃海〳〵〳〵調ふ〳〵〳〵波ゝみはひあひくゝる朝日ゝけかふ

千松灣雨聲

濱ゝひ砂〳〵きゝて降る雨ゝこすゝ鳴りくゝる松の邨〳〵ち

茗圃香風

朝ゆふの風も木芽の皆の香ゝうちふく頃とふりニけゝ哉

七曲逕行人

蟻よりもちひさく見ゝて行人をふゝくゝに七めくゝ〳〵

菅神祠櫻苔

ちはやふる神の御まへに白ひあひて齋垣櫻咲そ出にける

矢田埜積雪

曾ヒけニ分ふやゝ來るうち人ゝ矢田野の雪乃高さ波そ知る

鐘樓晩靄

夕ぐれかるさひき鐘の音ニ今日もくもゆく山寺の庭

御牟橋羣螢

さく波せと聚りくゝむ光とて螢も橋をたくれ夜ふく

翠眉山落月

たちくゝる山邊の月波をゝし餘り曉露ゝ立くぬるゝ

牛鼻崖漁燈

牛乃鼻すゝさぬき岩角を夜目も見せて續く漁火

雪

ちくゝ苔うくゝいり乃て看るゝも飽く丞とゝはあくぬ成へし

峰のそ礼咲出る見れハ稍ゝ立ゝ乃ゝうゝぬゝ雲のいろ

芎波いけすゝもてゝて山さくゝ綻ひ鈍るさくゝろゝくゝは

蘭画

山ゐ生て人きゝふもむ苔の繪をこゝはやゝとも書く世ふりけり

門柳

陽炎のもゆる岡邊ニいくゝる屋乃ゝとの青柳うせゝ枝ふ俗

藁ふきゝ雞さけふ賤ゝ門一ゝと柳ひ数志いゝゝなり

青柳風靜

打のほゝ佐保路ゝやちき靡く見て鰍ゝむ風ニ心ひくゝ

露をゝゝゆりはゆはさぬ昔ゝもを小枝ニすちてふひく青柳

雲雀

うゝ振ふゝゝも心乃すもむゝはおくるといひてひゝ鳴ゝむ

人ゝ志めゝ

眼前いまも神代ゝ神無くは艸木も生ゝ人もう海きし

福
祿
州